

令和 4 年 8 月 29 日現在

機関番号：33501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K10589

研究課題名(和文)在宅で妻を介護・看取った夫のグリーフケアに関する研究

研究課題名(英文) Research on Grief Care for Husbands Who Cared for and Endured Death of Their Wives at Home

研究代表者

大西 奈保子 (Onishi, Naoko)

帝京科学大学・医療科学部・教授

研究者番号：60438538

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、明らかにすることである。在宅で妻を介護した夫を妻の生前からケアした経験のある訪問看護師9名にインタビューを行い、その内容を質的帰納的に分析した。その結果、在宅で妻を介護した夫の看取りの特徴は、【夫婦のありよう】【非日常的生活の継続】【つながりの薄さ】【抑え込まれた悲しみ】妻との死別後、夫が悲嘆から回復し、生活再建に取り組むようになるためには長い夫婦生活の中で育まれた【夫婦のありよう】が重要と考えられ、訪問看護師は看取りの時期に【夫婦のありよう】に添いながら、夫婦が望む看取りのあり方を実現できるように支援していくことが必要と示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

配偶者との「死別」は、男性よりも女性の方が遺される割合が高い。そのため、日本では、配偶者と死別した男性よりも女性に対する支援が主とされてきた。しかし、配偶者との死別は、年齢・性別を問わず、人生においてはストレスフルな出来事であり、悲嘆からの回復には個人差とともに性差も関係しており、妻を亡くした夫が、死別後の悲嘆からの立ち直りに問題を抱える割合が高いと報告されている。そのため、在宅で妻を介護し死別した夫に焦点をあてて、妻の看取り期の夫の状況を知ることは、死別後、夫が生活再建をするにあたっての支援に役立つと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Purpose: Characteristics of end-of-life care provided at home by husbands to their wives. Method: Interviews were conducted with visiting nurses (N=9) that had experience of supporting such husbands since the time when the wives were alive. The content of the interviews was analyzed using the Grounded Theory Approach.

The results indicated that characteristics of end-of-life care provided by husbands composed of the following categories: "condition of marital life," "continuing the unusual life," "thinness of the connection," and "grief suppressed." Notably, the long-term conditions of marital life were considered important for husbands' recovery from grief and rebuilding their life. It is suggested that visiting nurses should provide support in the period of end-of-life care so that the couples can realize desirable methods of end-of-life care according to the condition of their marital life.

研究分野：ターミナルケア

キーワード：ターミナルケア グリーフ 看取り 夫 死別

1. 研究開始当初の背景

年間死亡者数の約 8 割が医療機関で亡くなっている日本の現状において、多死社会を見据えて、国も在宅での看取りを推進している。在宅で最期まで暮らす(在宅で看取る)ためには在宅ケアのシステムを充実させることが必要であり、国も在宅支援診療所を全国に設置し診療報酬の加算をしてきたが思うように在宅での看取りが進んでいない現状がある。すなわち、在宅での看取りを考えていくときに、在宅医療・福祉の連携や充実は言うまでもなく大切なことであるが、それだけでは在宅での看取りは成り立たない。在宅で看取るということは、家族が重要な要因になることは指摘されている(大西, 2015a; 2015b)。つまり、看取る家族の人生観・死生観の問題と大きくかかわることになり、在宅で看取る家族へのケアは発展途上の分野でもある。

また、死別後の悲嘆に関する研究では、成人した子どもよりも配偶者の方が遺される者としての悲嘆が強く、立ち直りに時間を要し(坂口, 1998)、さらに配偶者と死別した男性は女性よりも悲嘆からの回復が遅れる(人見ら, 2000)と報告されている。悲嘆は人間の正常な反応ではあるが、死別後の悲嘆からの回復の遅れは、複雑な悲嘆に陥るリスクを高め、日常生活に何らかの支障をきたし、実生活の再建にも困難を生じる。

一方、日本社会においては伝統的に介護を妻や娘、嫁に頼るのが一般的であった(山本, 2001)ため、日本の介護者に関する研究も介護負担など介護する女性に焦点が当てられてきた。しかし、家族形態の変化や女性の社会進出などによって、今日では男性が介護の主役になることも多く、加えて夫婦のみ世帯の増加は、高齢の妻が夫を介護するのみならず、高齢の夫が妻を介護し看取るケースの増加にもつながると推測される。そのため、今後、在宅での看取りを増やしていかざるを得ない現状では、看取り後のフォロー体制も確立させていく必要があり、看取り後の悲嘆からの回復に問題を抱えやすい妻を看取った夫の在宅での介護・看取りの状況、および看取り後の悲嘆について現状を明らかにしグリーフケアの方略を考えていくことが必要である。

2. 研究の目的

妻と死別した夫は、悲嘆からの回復が遅いということは先行研究からも指摘されているが、従来、介護は女性が担うものという社会通念もあり、介護する夫の実態や支援の必要性はなかなか認知されていない。医療は在宅ケアにおいて多くの場合、関わっていることが多く、患者を看取る前から家族に関わっており、その関わりが家族の看取り後の悲嘆にも影響する。つまり、そこが医療者としての強みであり、その強みを生かすことで、死別後の家族がその悲しみから回復する援助にもなると言える。

そのため本研究の目的は、在宅で妻を介護し看取った夫への看取り後の悲嘆への援助の一助にすべき以下のことを明らかにする。

- 1) 日本で配偶者との死別による研究が行われてきた 1980 年代(白川, 2015)を鑑み、過去 30 年間の国内の先行研究を概観し、配偶者を介護し看取る夫への支援の方策を立てるために、配偶者を介護し看取った夫の思いや体験に関する文献を検討することである。
- 2) 在宅で妻を介護し看取った夫が、在宅ケア中、看取り時の様子などを、実際に夫に接した訪問看護師にその時の状況についてインタビューを行い、在宅で介護・看取る夫の共通性を見出し、訪問看護師の支援についても明らかにする。

3. 研究の方法

1) 文献レビュー

文献の検索期間を 1988 年から 2019 年とし、2019 年 7 月に検索を行った。医学中央雑誌を基に原著論文にて、「ターミナルケア or 看取り」「夫 or 配偶者」のキーワード検索したところ 170 件、「悲嘆 or グリーフ」「夫 or 配偶者」のキーワード検索したところ 167 件の文献が抽出された。それらの文献の抄録または本文を読み込み、対象者が小児や母性の死別に関するもの、介護もしくは看取りにかかわった対象者が夫のみではなく配偶者としているもの、その他の家族も含んで分析しているもの、看護学生の実習に関するもの、倫理に関するもの、夫へのケア実践が主であるものなど論点が異なる文献は除外した。そして、これらの文献のうち重複するものを除き 10 文献(長澤他, 2017; 高儀他, 2013; 実藤, 2009; 松井他, 2015; 鈴木他, 2005; 沼田他, 2009; 宮島他, 2011; 東他, 2005; 八木他, 2003; 渡邊他, 2015)が抽出され、この 10 文献を研究対象とした。さらに、「データ収集時期」「思いや体験の時期」「対象者および人数」「対象者の年齢」「妻を看取った場所」「夫の思いや体験の内容」の視点で分類した。

2) インタビュー分析

自宅で妻を介護した夫の看取りの特徴と訪問看護師の支援について、夫婦との相互関係を通して得られた訪問看護師の認識から探るため、研究承諾の得られた訪問看護師に 1 時間程度のインタビューを行った。面接内容は、許可を得て録音した。質問内容は、自宅で妻を介護し看取った夫とその妻の訪問を担当した事例の中で、夫とのかかわりが深くより心に残っている事例や看取る夫とのかかわりが困難であった事例について、看取りの時期および死別後の夫の様

子、在宅で妻を介護し看取った夫への支援を中心にインタビューを行った。インタビュー内容は、分析途中で引き出された概念をもとに問いを発展させ、次のインタビューの問いとなるようにデータ収集を行った。なお、インタビューでは、語り手の話の流れに沿いながら、その時、どう感じ、どう考え、どう判断したのかを常に対象者に質問するようにした。

録音した面接内容は、すべて文章にしてデータとした。グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Corbin & Strauss, 2008/2012) を参考に継続的比較分析を行った。

4. 研究成果

1) 文献レビュー

(1) 妻を介護し看取った夫の思いや体験の時期

妻を介護し看取った夫の思いや体験を扱った文献は 2000 年以降のものであり、全体的に夫に関する研究がなされてきたのは最近のことであると言える。これは、日本の現状が、単身世帯および夫婦 2 人世帯の増加により、主介護者を夫が担うこともまれではなくなり、死別後の夫の生活再建や悲嘆からの回復に課題がある (人見, 2000; 小谷, 2017) と指摘されていることと関係すると考える。特に死別後の悲嘆に関する研究では、配偶者の場合と成人した子どもが親と死別する場合との比較 (坂口, 1998)、配偶者との死別での男女の比較 (高橋, 1989) など、配偶者との死別、特に配偶者と死別した男性の悲嘆に問題提起を投げかけているものが見受けられる。今回は、対象者の一部に、若年・壮年期の男性が含まれている (実藤, 2009; 鈴木他, 2005; 沼田他, 2009) が、全体的に対象者が高齢の男性であり、若年・壮年期者より高齢者のほうに支援の視点がもたれてきた (白川, 2015) ことになり、高齢化を反映しているものと考えられる。

(2) 縦断的な視点からみた夫の思いと体験

妻を介護し看取った夫の思いや体験を扱った文献は、妻の介護から看取りの時期の体験と死別後の体験に大別される。前者の妻の介護から看取りの時期の夫の思いや体験を扱った研究は、日本ではそもそも介護は女性が担うものとしてきた慣例があり、夫の介護についての文献自体も少ない。夫の介護に関する研究では、高齢の夫婦が介護継続の意思を持ち続けられる要因 (高橋他, 2006) や長期にわたって在宅で妻を介護している高齢の夫が介護を継続できる要因 (木村他, 2012) などがみられ、介護が継続できる要因に相手に対する愛情というものを挙げている。つまり、介護や看取りは、夫婦の関係性が基盤となって、そこに夫の考えや資質、他者からの支援などの要因があって達成できるものではないかと言える。

一方、後者の看取り後の夫の思いや体験に焦点をあてた研究は、夫の悲嘆に関するものであり、現在の生活状況と夫の悲嘆の状態を調べているものが大半であった。死別経験に関する研究は当然のように死別後に焦点があてられてきたが、ライフコースの視点からなど、死別前からの認識の変化、あるいは意味づけのプロセスを含めた研究が必要になってくる (小林, 2008) と指摘されている。また、死別前に、夫婦で妻の死について話し合いが十分できた夫は、死別後に夫婦で同じ時間を過ごすことができたという思いをもつことができる (Hauksdóttir et al., 2010) と指摘されている。反対に死別の 3 か月の間に妻と終末期に関する話を十分にできなかった夫は、その罪悪感を引きずる可能性が高く (Stroebe et al., 2000)、死別後に心理的な症状として現れる可能性が高い (Weinberg, 1995) とも指摘されている。このような死別前の夫婦のかかわりは、死別後の夫の悲嘆にも関係してくるため、グリーフケアの視点からも死別前からの援助者とのかかわりが重要である (工藤他, 2018)。すなわち、死別後の悲嘆は死別後から始まるものではなく、妻の生前からの夫婦関係や他者とのかかわり、介護中の生活のありよう、夫の感情表出を含めた悲嘆の様子などが関係していると考えられる。このため、死別後の夫の悲嘆に関する研究は、死別前からのライフコースの視点を踏まえた研究が必要であると考えられる。

(3) 在宅で妻を介護し看取った夫に関する研究の今後の課題

在宅での介護や看取りは今後、社会の情勢からも増えていかざるを得ないことが予想され、妻を在宅で介護し看取る夫に対する支援の必要性から、在宅での介護や看取りに関する今後の研究蓄積が重要となると考えられた。

また、妻を介護・看取った夫の思いや体験は、夫の思いや体験を介護から死別後までを縦断的に調査した文献がないということが明らかとなり、妻の介護中から看取り後の夫の生活再建の時期を通じて、夫の思いや体験のありようを調査していく必要があると考えられる。特に配偶者と死別する夫の悲嘆に関する研究は、親や配偶者との死別、男女の違いなど、配偶者と死別した男性が悲嘆からの回復に課題があるということが、国内外の研究によって指摘されている。しかし、それらの研究のほとんどが、配偶者との死別後に調査されたものであり、死別前からのライフヒストリーに焦点をあてて死別後悲嘆を論じた文献がほとんどないことも明らかとなっている。死別後の夫の悲嘆は、妻と生活を共にした夫婦のライフヒストリーと深く関係し、死別後の一時点だけを取り出して、夫の悲嘆を語るのとは不十分であると言える。そのため、死別前の夫婦のライフヒストリーの中でも、特に妻の介護や看取り時期の夫婦の関係や生活状況が、死別後の夫の悲嘆に関与している可能性が高いと指摘されていることもあり、妻の介護や看取りの時期に焦点をあてながら夫の死別後悲嘆を調査し、在宅で妻を介護し看取る夫への支援につなげていく必要がある。

2) インタビュー分析の成果

(1) 研究対象者および語られた事例(夫婦)の概要

インタビューを行った訪問看護師は9名、うち男性2名、女性7名、年齢は27歳から51歳（平均：41歳）、看護師経験年数は5年から30年（平均17.9年）、うち訪問看護師の経験年数は7ヶ月から13年（平均6.6年）であった。インタビュー時間は40分から77分（平均60分）であった。

主に対象者が語った事例は、夫が介護した妻の疾患はがん5名、非がん4名であり、夫婦ともに30歳代から70歳代であった。すべて自宅で妻を介護したが、最終的な看取りが自宅であった事例は4事例、病院（緩和ケア病棟を含む）が5事例であった。加えて、訪問看護師から語られた夫の事例は、看取り前後から長い人で看取り後1年の夫の様子であり、悲嘆からの回復が遅いまたは共依存関係の夫婦など、介護中からすでに問題を抱え、死別後の生活再建に支障をきたしている夫の事例など多岐にわたっていた。

(2) 在宅で妻を介護した夫の看取りの特徴と訪問看護師の支援

在宅で妻を介護した夫の看取りの特徴は、【夫婦のありよう】【非日常的生活の継続】【つながりの薄さ】【抑え込まれた悲しみ】であり、在宅で妻を看取り期に介護した夫への訪問看護師の支援は、【非日常的生活中での看取りを支える】【抑え込まれた悲しみからの回復を促す】であった。夫による在宅ケアは、どちらを欠いても成り立たない、もしくは二人がそろって初めて夫婦という、切り離すことのできない【夫婦のありよう】が基盤にあり、看取られる妻、家事や介護をこなしながら看取る夫という平時とは異なる生活の継続、つまり【非日常的生活の継続】を担う力を持ち合わせていることで成り立っている。介護の継続においては夫にとって夫婦二人だけの世界が展開され、他者との【つながりの薄さ】によって、つながりがあまり力を為さず、支えになるだけの影響力がない。また、死別後には介護に頑張ってきたのに出来なかった後悔が強く、寂寥が募っても【抑え込まれた悲しみ】のために感情を出せない。

そのため訪問看護師は、それぞれの【夫婦のありよう】に添いながら妻を看取り期に介護するという【非日常的生活の継続】ができるように【非日常的生活中での看取りを支える】支援を行うとともに、【抑え込まれた悲しみ】を緩和する支援として夫の【つながりの薄さ】に注目し、他者とのつながりの中で妻のいない現実に対応できるように【抑え込まれた悲しみからの回復を促す】ための支援をしていた。すなわち、在宅で妻を看取り期に介護する夫への訪問看護師の支援の過程は、妻の介護中においては【非日常的生活中での看取りを支える】支援に主軸をおいて夫を支え、看取りが近づくにつれて【抑え込まれた悲しみからの回復を促す】支援を始め、看取り後には【抑え込まれた悲しみからの回復を促す】支援を主軸として展開していく過程を辿る。

そもそも夫と妻とはどちらを欠いても成り立たない関係であり、Fletcherら(2012)が述べるように「介護も看取りも夫婦にとっての経験」であるといえる。訪問看護師がこのような個々の夫婦それぞれの【夫婦のありよう】を重視して、それを見極めながら両者が看護師に対して弱音をはけるような関係づくりを心掛けたり、夫婦の個々の思いが互に通じ合うように橋渡しをしたのは、看取る夫と看取られる妻という関係にあっても、夫による在宅での看取りには、やはり夫婦で築いてきた関係と生活が基盤にあるからであり、在宅で妻を看取る夫の支援には、まずは【夫婦のありよう】を見極めて夫婦に添いながら支援することが大切であると考えられる。

(3) 妻と死別した夫への援助に対する課題

妻を看取り期に介護した夫は、「自己の感情を抑えている、または、表現することが苦手」、「看取りの覚悟をもっていたとしても、夫婦のありようによっては在宅介護を断念せざるを得ない」、「つながりが薄い」という特徴があり、これらは夫の悲嘆の特徴でもあり、妻が夫を介護した場合との違いであると考えられる。そのため社会とのつながりがうすい夫の場合には、妻を失ったあとの生活再建に課題を残し、複雑な悲嘆に陥る危険性がある(Hauksdottir et al, 2010; 人見ら, 2000)と指摘されており、そのようなことを回避するためにも夫に対する中長期的な死別後の【抑え込まれた悲しみからの回復を促す】支援の継続が求められていると考察される。しかし、現在のところ、我が国のグリーフケアは制度として位置づけられておらず、財政的な支援がないことや訪問看護師自身にグリーフケアのノウハウがないなどの課題(工藤ら, 2016)も挙げられている。今後は、単に訪問看護師によるボランティアな活動で支えるということではなく、遺族への悲嘆への継続的支援を制度・政策の中に組み込むことや、近所との関係づくり、地域社会とのつながりの中で、社会全体としてグリーフケアを考えていく必要があると考えられる。

<引用文献>

- Corbin, J. & Strauss, A. (2008)/ 操華子, 森岡崇訳(2012): 質的研究の基礎~グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順(第3版), 医学書院, 東京.
- Fletcher, B., Miaskowski, C., Given, B., et al. (2012): The cancer family caregiving experience: an updated and expanded conceptual model, Eur J Oncol Nurs, 16(4), 387-398.
- Hauksdottir, A., Valdimarsdottir, U.C., Fürst, J., Onelöv, E., Steineck, G. (2010): Health care-related predictors of husbands' preparedness for the death of a wife to cancer - a population-based follow-up. Ann Oncol., 21(2) February :354-361.
- 東 清巳, 永田 千鶴 (2005): 男性高齢者の配偶者喪失後におけるアイデンティティの揺らぎと対処. 熊本大保健紀, (1):47-56.

- 人見裕江,大澤源吾,中村陽子,他(2000):高齢者との死別による介護者の悲嘆とその回復に関連する要因,川崎医療福祉学会誌,10(2),273-284.
- 木村麻紀,谷口さゆり,和泉とみ代,岡野初枝(2012):高齢の夫が在宅で妻の介護を継続する要因.吉備国際大研紀 医療・自然科,22:15-25.
- 小林信一(2008):配偶者との死別研究に関する性差の視座-男性にとっての配偶者との死別経験とは何か.京都大院教育学研紀,(54):247-257.
- 小谷みどり(2017):配偶者と死別した独居高齢者の人間関係,Life Design Report.<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2017/wt1707b.pdf>(20190210 閲覧)
- 工藤朋子,古瀬みどり(2016):訪問看護師が捉えた利用者遺族を地域で支える上での課題, Palliat Care Res, 11(2), 201-208.
- 工藤朋子,古瀬みどり(2018):死別後支援が必要な家族介護者を訪問看護師が予測する要因の抽出. Palliat Care Res, 13(3): 287-294.
- 松井 利江, 福田 陽子, 布谷 麻耶:進行期卵巣がんの妻と療養を共にした壮年期配偶者の体験 2人の遺族の分析.天理医療大学紀要,3(1):16-24,2015.
- 実藤 基子(2009):死を迎えた再発乳がん患者の配偶者(夫)の思いと希望 臨床看護現場での面接内容からの分析. 死の臨床,32(1):123-129.
- 宮島 ひとみ, 北山 三津子(2011):配偶者と死別した高齢男性の成長感に影響を与える要因.岐阜看護大紀,11(1):37-44.
- 長澤 久美子, 山村 江美子, 岩清水 伴美:在宅で妻を介護する夫介護者を支えた要因 看取り後の振り返りを通して.せいいい看護会誌,8(1):8-14,2017.
- 沼田 靖子, 吉谷 優子, 本間 仁子(2009):死別後1年間の夫の感情の変化に関する研究.ホスピスケア在宅ケア,17(3):245-253.
- 大西奈保子(2015a):がん患者を在宅で看取った家族の覚悟を支えた要因,日本看護科学会誌,35,225-234.
- 大西奈保子(2015b):在宅で看取った家族の思いと看護への応用,帝京科学大学紀要,11,41-48.
- 坂口幸弘(1998):死別後の悲嘆に関する研究(1)残された配偶者と子どもの比較,大阪大学臨床老年行動学年報,3,13-22.
- 白川あゆみ(2015):わが国における配偶者と死別した男性の心理社会的影響に関する文献検討.日地域看護会誌,18(1):102-109.
- Stroebe.M., van Son.M., Stroebe.W.(2000):On the classification and diagnosis of pathological grief. Clin Psychol Rev., 20 (1) :57-75.
- 鈴木 はるみ, 滝川 節子(2005):配偶者との死別体験を有する男性の悲嘆と関連要因に関する研究.死の臨,28(1):94-100.
- 高儀 郁美, 高岡 哲子, 永谷 智恵:終末期がん患者の望む在宅療養と看取りを实践した夫の体験. 医と生物,157(5):509-515,2013.
- 高橋久美子(1989):老年期における配偶者喪失~死別への準備と適応.日家政会誌,40(7):575-585.
- 高橋(松鶴)甲枝,井上範江,児玉有子(2012):高齢者夫婦二人暮らしの介護継続の意思を支える要素と妨げる要素 介護する配偶者の内的心情を中心に.日看科会誌,26(3):58-66,2006.
- 渡邊 章子, 諏訪 さゆり(2015):病気の妻を亡くした認知症高齢者のグリーンワークへの支援.認知症ケア事例ジャーナル,7(43):68-378.
- Weinberg.N(1995):Does apologizing help? The role of self-blame and making amends in recovery from bereavement. Health Soc Work., 20 (4) :294-299.
- 八木 彌生, 松田 光信(2003):訪問看護ステーションにおけるターミナルケアの課題 遺族であるN子さんの夫へのインタビューをとおして.ホスピスケア在宅ケア,11(3):281-287.
- 山本則子(2001):家族とジェンダー, 家族看護研究,6(2),158-163.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Onishi Naoko, Koyama Tikayo, Tanaka Itsuki	4. 巻 40
2. 論文標題 Characteristics of End-of-life Care Provided at Home by Husbands to Their Wives and Support of Visiting Nurses	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Japan Academy of Nursing Science	6. 最初と最後の頁 113 ~ 122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5630/jans.40.113	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大西 奈保子、田中 樹	4. 巻 16
2. 論文標題 配偶者を介護し看取った夫の思いや体験に関する文献レビュー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 帝京科学大学紀要 = Bulletin of Teikyo University of Science	6. 最初と最後の頁 1 ~ 6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18881/00000674	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大西奈保子・田中博子・田中樹・小山千加代
2. 発表標題 在宅で妻を介護し看取った夫の特徴とその支援
3. 学会等名 日本老年看護学会第24回学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	小山 千加代 (Koyama Tikayo) (50597242)	新潟医療福祉大学・看護学部・教授 (33111)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 博子 (Tanaka Hiroko) (60513976)	帝京科学大学・医療科学部・准教授 (33501)	
研究分担者	田中 樹 (Tanaka Itsuki) (00804189)	帝京科学大学・医療科学部・講師 (33501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関